

スポーツ健康福祉学科 <アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策

「プロフィール」設問 1～5

設問1のアンケート回答率がこれまで以上に非常に少ない結果であった。

回答した学生の半数の50%が自家用車での通学、25%がバイク通学であり、通学時間も回答者全員が30分以内であった。多くの学生が自家用車やバイク、自転車を利用していることから、交通安全、事故防止についての指導が必要である。

「大学生活について」設問 6～26

「クラブ・サークル活動」に参加している学生が多く回答でも半数(50%)が参加していた。クラブやサークル活動の頻度は週1～3回が50%、週4～6回が12.5%である。次いで多かったのが「アルバイト」で、こちらは週1～3回が62.5%、週4～6回が37.5%で、毎日行っている学生はいなかった。一方、図書館や自宅での「自習」と回答した者がまったくいない結果であった。

好きな講義は多くの学生が2～4つあるとしているが、なしという学生もいた。

悩みについては、「勉強や成績のこと」「進路や就職のこと」が多い。一方で、誰に相談するかについては、全員が「友人」に相談し、半数が「チューター」に相談している。しかし、誰にも相談しないと回答した学生もいる。「休学や退学をしたいと思った」「退学を考えた」の回答がそれぞれ1名づつおり、その理由がどちらも「学力の問題」としている。

「自主学習について」設問 27～29

平均勉強時間は、平日、休日とも半数程度の学生が「30～60分未満」であった。0時間、120分以上はいなかった。

シラバスに予習・復習が書かれていることについて、75%が知っており、25%は知らないと回答している。

「学科としての対応・改善策」

まず回答率の低さが非常に問題である。この点が学科の分析結果として有効であるかという問題点があげられる。今後、各教員が積極的にアンケートに回答するよう働きかけを強化しなければならない。

大学生活では、本学科の大きな特徴として、「クラブ・サークル活動」を行っている学生が多いことがあげられる。また「アルバイト活動」も積極的に行い、生活費やクラブ・サークルの活動費に充てていることが推察される。一方で、「悩み」については、多くが「勉強や成績」「進路や就職」のことであり、「休学や退学を考えた」原因も「学力の問題」であった。また、「自習時間」も30～60分未満が多く、シラバスに「予習・復習について」書かれていることを知らない学生もいた。資格の取得を目指すためには積極的に学習に取り組む必要がある。その悩みの相談相手は全員が「友人」に相談をしているが、「チューター」が半数、「チューター以外の教員」が若干であることから、成績不振での留年や退学を防ぎ、望む資格取得を目指すためにも、早い段階から勉強や成績、就職のことを教員に相談できるよう働きかけを行う必要があると考えられる。

臨床福祉学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

調査対象者 112 名中、回答者数 42 名で回収率 37.5%であり、全学で見ると 2 番目に高かった。これを学年別にみると 1 年 11 名 (26.2%)、2 年 3 名 (7.1%)、3 年 14 名 (33.3%)、4 年 14 名 (33.3%) で、チューター・ゼミ担の協力依頼が比較的有効に働いていることが伺われる。一方で 2 年生がチューター指導の空白期間となっている可能性も見て取れる。性別で見ると男子 16 名 (38.1%)、女子 26 名 (61.9%) であり、この調査における女子学生の協力度が大である。通学手段は自転車 4 名 (9.5%)、バイク 5 名 (11.9%)、自動車 22 名 (52.4%)、バス 7 名 (16.7%)、電車とバス 4 名 (9.5%) であり、自動車通学の多さが際立つ。通学時間は 30 分以内が 29 名 (69.0%)、30 分～60 分が 8 名 (19.0%)、60 分以上が 5 名 (11.9%) であり、多くが市内在住者であることが伺われる。

「大学生活について」設問 6～26

多岐にわたる本項目の設問から、本学科学生の凡そ次のような特徴（平均像）が浮き彫りとなろう。

- 1) 生活の中心が学習 (50%) とアルバイトにある学生 (19%) が多いものの、アルバイトをしていない学生 (約 48%) も相当数いる。また、全くサークル活動をしていない学生 (約 76%) も非常に多い。
- 2) 入学前後の大学に対するイメージはほぼ安定している (69%) が、悪くなった者も 1 割いる。
- 3) 大学ではほぼ講義研究棟で過ごし (約 71%)、休暇にあつてはアルバイト (約 48%) やボランティア (約 29%) をする学生が多い。
- 4) 学生は学費を親や親戚からの援助 (約 81%) や奨学金 (約 61%) に頼っているケースが多い。一人暮らしや友人と一緒に住む学生が約 45%、家族や親戚と同居する学生が約 55%いるが、前者の生活費 (家賃・水道光熱費以外) は 3-5 万円 (約 53%)、後者は 3 万円未満 (約 57%)、当然ながら前者の負担が重くなる。生活費は両者とも主に親が工面しているケースが最も多い (それぞれ約 78%、約 57%) が、後者はアルバイト (約 42%) や奨学金 (約 32%) を充てているケースも多い。
- 5) 好きな授業が 2-4 科目ある学生が多い (約 52%) が、特にないという者も一定数 (24%) いる。
- 6) 進路や就職 (約 45%)、勉強や成績 (約 38%) の悩みを抱える学生が多いが、悩みは友人 (約 87%) や肉親 (74%) に相談することが多く、チューター (約 52%) 及びその他の教員 (約 36%) がこれに続く。休学したいと思ったことのある学生は約 3 割おり、その中では心身の理由 (58%) によるものが最も多い。退学を考えたことのある者も約 2 割おり、半数が同様の理由によるものである。

「自主学習について」設問 27～29

平日の自主学習の時間については 30-60 分未満の者が約 38%と最も多く、次いで 60-120 分未満が続く。休日については 60-120 分未満が約 33%と最も多く、120 分以上が 26%とこれに続いた。シラバスについては約 76%が「知っている」と回答し、「知らない」と回答した者は約 24%であった。大部分の学生が知っていることになるが、しかし、この回答からは「どの程度知っているのか」つまり内容を本当に理解してその通り学修を進めているか否かは把握できないため、授業における再度の内容共有が必要となるかもしれない。

「学科としての対応・改善策」

コロナ禍ということもあろうが、サークル活動等大学での人間関係をつうじた積極的な人格形成がなされていない学生が多いのではないかと危惧される。伝統校や大規模校と比較すると、否、本学の 2010 年代と比較しても、この部分の物足らなさを感じるのである。大学の存在意義は資格取得のみにあらず、異なる他者との切磋琢磨を通じて成長する「場」であると考えれば、学業以外の魅力を作り出す仕掛けや支援も必要となってくるのではないかと。学習や心身に不安を抱えている学生も目立つことから、チューター・ゼミ担によるより一層のきめ細かなフォローが必要になるだろうが、その際にパーソナリティーに関係する相互の相性について回ることから、大学としてカウンセリング人材の配置と部署の充実を図ることも必要であろう。

作業療法学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

回答率は4年次の6.1%（2名）しかなかった。3年次からの回答はなかった。3年次の未回答はアナウンス不足と遠隔授業の影響があると考え、アナウンス不足も原因であると考え。4年次についてはアンケート期間が臨床実習直前だったことも理由として考えられる。男女の比率は同じ（男女ともに1名）だった。通学手段は自動車が1名、バスが1名だった。通学時間は30分以内だった。回答者が延岡市内のアパートだったからである。

「大学生活について」設問 6～26

講義外の過ごし方はサークル活動とゲームが1名ずつだった。アルバイトは2名とも年に数回だった。大学に対するイメージは2名とも変わらないだった。休暇の過ごし方は2名とも帰省だった。またアルバイトや旅行などもある。学費は2名とも親の負担であった。また、2名とも一人暮らしだった。生活費用は5～10万以内であり、親の負担とアルバイトだった。好きな講義は2名とも、2～4つだった。悩みは1名が成績、1名が進路だった。休学については進路に悩む1名が考えていた。

「自主学習について」設問 27～29

平日の勉強時間は30～60分未満と60～120分未満が1名ずつだった。シラバスの予復習記載に対する認知は1名（50%）だった。

「学科としての対応・改善策」

回答者が2名（6.1%）のみと圧倒的に少なく、全ての項目について解釈することができない。回答が少なかった理由は、教員のアナウンス不足とコロナ禍による閉塞感もあるかもしれないが、学科の募集停止による未来のない学科に対する諦観のあらわれのようにも考える。

現在、実質的には4年次を残すのみであり、臨床実習が終わった今、国家試験対策に邁進していただく。

言語聴覚療法学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

回答率は16.7%（5名/30名）であり、3年生が全体の40.0%、4年生が60.0%を占めていた。通学手段はバイクが60.0%、自動車が20.0%、バスが20.0%で、通学時間は回答者全員が30分以内でした。公共交通機関であるバスの利用が比較的少なく、自らで通学手段を確保する必要性を示していた。

「大学生活について」設問 6～26

60.0%が講義以外の時間を学内自習が比較的多かった。入学後クラブやサークル活動に参加をしているのは40.0%であった。80.0%がアルバイトしており、アルバイトをしている場合、最も多い頻度は週に1～3回であった。入学前後に本学のイメージは60.0%の学生が変わっていないと回答し、40.0%が悪くなったと回答しており看過出来ない数字といえる。キャンパス内で過す場所は講義研究棟が80.0%であった。休日の過ごし方は60.0%が帰省、60.0%がアルバイトをしていた。20.0%が家族との同居であり、80.0%が一人暮らしであった。学費は全員が親や親族からの援助を受け、80.0%が奨学金を利用していた。一人暮らしの場合も、生活費は3～5万円が50.0%、5～10万円が25.0%を占めていた。工面は親などからの援助が62.5%を占めたが、アルバイトが41.7%であった。

好きな講義や実習の数はなしが40.0%、2～4つが60.0%であった。大学生活での悩みは、進路や就職のことが20.0%であった。また、悩みの相談の相手は、友人が全員であり、次いで親・兄弟姉妹等やチューター教員が40.0%と多くなっていた。休学した経験あるいは休学を考えた学生は20.0%で、その理由は教員との問題であった。留年経験はいなかった。また、退学を考えたのは20.0%で、教員との問題であった。

「自主学習について」設問 27～29

平日1日の平均勉強時間は30分～1時間が40.0%で、1時間以上が40.0%いた。休日の平均勉強時間は30分未満が40.0%で、40.0%が1時間以上であった。シラバスの内容は、80.0%周知していた。

「学科としての対応・改善策」

本学のイメージは学生の全員がポジティブに変化しなかった。その理由として、①4割が好きな講義や実習がないことが挙げられる。本学科も他学科同様、臨床実習や国家試験が必須となっているため、授業内容はある程度、決まっている。しかしながら、その教授方法は各教員が工夫でき、より魅力ある授業を展開出来得ると考えられる。学生が復習を自主的に行うような授業の工夫が必要であろう。そのことが、授業への動機付けに相乗的な作用をもたらすと考えられる。

また、教員が相談相手になれるように、積極的なコミュニケーションを図る必要がある。普段、教員から進んで声をかけるとともに、各教員のオフィスアワーの周知を図り、その時間帯をうまく活用して学生が自主的に、気軽に話せるような環境づくりが大切であろう。本学科は今年度で統廃合されるため、このデータを部分的に、臨床心理学科に活かしていきたい。

視機能療法学科 <アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策>

募集停止のため、在籍学生は4年生8名のみであった。そのうち、回答のあったのは2名であった。

「プロフィール」設問 1～5

回答者はいずれも女性で、通学手段は自動車であった。通学時間は30分以内が1名、30～60分が1名であった。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活の中心は、サークル活動が1名、その他が1名で、サークル活動の頻度は月に1回であった。アルバイトは1名がしており、その頻度は年に数回程度であった。入学前後の学科のイメージは、変わらないが1名が悪くなったが1名であった。大学内で主に過ごす場所は2名とも講義研究棟であった。

学費の工面は2名とも奨学金であり、加えて1名は親からの援助を受けていた。現在の同居者は一人暮らしが1名、家族と同居が1名で、家族同居の生活費は5～10万円、一人暮らしの生活費は3万円未満であった。生活費の工面は、家族同居では奨学金とアルバイト、一人暮らしでは奨学金と親からの支援であった。

好きな講義は1名がなし、1名が2～4つであった。大学生活に悩みがあるのは1名で、その内容は経済的問題、勉強や成績のこと、進路や就職のことであった。悩みの相談相手はチューター教員や親族、友達であった。

1名は休学またはそれを考えたことがあり、その理由は身体的な問題であった。

「自主学習について」設問 27～29

平日の学習時間は1名が30分未満、1名が60～120分であった。また、休日の勉強時間は1名が0時間、1名が60～120分であった。

「学科としての対応・改善策」

募集停止のため、該当記述なし

臨床工学科 <アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策>

学科としては募集停止しており、生命医科学科に統合されているため、アンケート結果の分析等については、生命医科学科に含める。

なお、在籍学生は3・4年生で33名。そのうち、回答のあった人数は3名であった。

薬学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

薬学科では各学年より満遍なく回答が得られたが、回答者の72%は女性であった。在学生の男女比から女性の回答率が高いことが考えられる。通学手段は自動車が57%と最も多く次いでバス通学であった。通学時間は30分以内大半であるが、1時間以上かけて通っている学生も少数ながら存在するようである。さらに公共交通機関を利用して通学している学生が計22.8%いるため、これらの学生に対しては講義および実習の終了時間の配慮、台風などの自然災害時の対応が必要と考えられる。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活サイクルの中心では、学内自習、図書館自習および自宅での自習を行う学生の割合が71.3%と多くの学生が自習を行っていることが分かる。一方でサークル活動を全く行っていない学生の割合が81.6%と多く、気分転換の機会の減少や先輩後輩との繋がりが希薄になっている可能性が考えられる。これらの点から、小グループでの付き合いしか行わない学生が増えていることが推察できる。これはコロナ禍の影響が大きいのもかもしれない。また、好きな講義・実習が2つ以上と答えた学生が47.8%と前回の調査に比べて減少していた。さらに、ないと答えた学生は41.5%と増加しており、薬学・薬剤師に興味を持たずに入学している学生が増加傾向にあると考えられる。この点が影響しているのか、休学や退学について考えたことがある学生が20%程度と多く、その理由として勉学意欲の喪失、学力の問題が多く挙げられた。このような学生の勉強に対するモチベーションを上げるための方策が重要である。

大学生活の悩みとしては、勉強や成績(63.2%)、進路や就職(36.8%)が多く、この2つの項目は前回の調査時よりも選択者が増加していた。やはり勉強や将来のことをストレスに感じている学生が多いようであり、これらの悩みを早期に収集できるシステムの構築が必要であると考えられる。また、「予定が決定するのが遅いため、予定を立てることが難しく困っている。」という趣旨のコメントがあった。アルバイトや他県への帰省に与える影響が大きいいため、対策が必要である。

「自主学習について」設問 27～29

大学内および自宅で自習を行う学生が70%を越えていたが、一方で平日の1日の勉強時間の合計が120分未満である66.9%であった。専門科目の修得には予習復習をそれぞれ1時間以上行うことが推奨されているため、半数以上の学生が十分な勉強時間を確保できていないことが推測できる。この点が、留年したことがある学生の割合が20%と高いことに関係していると考えられる。

「学科としての対応・改善策」

学生の76%程度が車やバイク、自転車通勤していることから、オリエンテーション等で定期的に交通安全の指導を強化する。また、通学に長時間を要する学生に配慮して、講義終了時間の徹底を行うと共に、終了時間が不規則な実習については、実施日毎の終了予定時刻を予め伝えることとする。また、通常の時間割に科目のない時間帯での補講については、アルバイト等の予定を入れている可能性があるため、1ヵ月程度の余裕をもって通知することを基本とする。

留年率の高さ、つまり学力の低下については、自習時間の減少と相関性があると考えられる。十分な自習時間を確保させるため、科目ごとの具体的な予習復習の必要時間を通知することとする。また、勉学意欲が湧かない学生に対しては、モチベーションを上げるために、チューター他による定期的な面談が必要である。低学年の学生が複数の先輩と情報交換できるイベントを前期および後期にも作ることも検討する。加えて、各学年の理解度や講義中の態度・雰囲気について、全教員がリアルタイムで情報共有できるシステムについてガルーンなどを用いて構築する。

動物生命薬科学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

- ・回答した学生は全て30分以内の通学時間であり、問題はないと考えられる。
- ・ただし、授業開講期以外のバスの本数が著しく少なく、バス通学をしている学生からは飼育当番などに不便を感じているとの意見もあり、授業開講期以外も授業開講期と同程度のバスを運行してもらいたい。

「大学生活について」設問 6～26

- ・設問9の結果、入学前後でのイメージの変化はないと回答した学生が多いことから、広報の方向性は問題ないと思われた。
- ・設問10の結果、多くの学生が講義研究棟（おそらく、大学会館）で過ごしていることから、大学会館における次週スペースなどの学生施設拡充が望まれる。
- ・設問19の結果、勉強や成績、進路や就職についての悩みが多いことから、今まで以上に学生面談などで、話をよく聞く必要があると思われた。
- ・本学科ではパワハラがあるという報告は受けていないが、学生対応には十分気を配る必要があると思われた。
- ・設問21、設問22、設問25、設問26の結果、少ないとはいえ、休学や退学を考えた学生がいることから、学生の様子をよく観察し、教員相互での情報共有などを行うことにより、そのような学生を早期に見つけ出し、対応する必要があると思われた。

「自主学習について」設問 27～29

- ・設問28の結果、思いのほか勉強時間が少ないため、宿題や復習小テストの実施などにより、勉強する習慣を身に付けさせる必要があると思われた。

「学科としての対応・改善策」

- ・設問ごとに、対応や改善策を記載したが、総じて言えることは、学生の声に耳を傾ける機会を十分に持ち、ハラスメントとならないように学生対応には十分な配慮をすることが必要であるということであり、このことが学科としての対応・改善策であると考えられる。
- ・勉強をする目的を明確化するために、各種資格取得のためのロードマップを作成し、学生に提示してもよいかもしれない。

生命医科学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

アンケートに回答した生命医科学科学生のうち通学手段として46%がバイクあるいは車で通学しており交通安全に注意喚起が必要である。また通学時間60分以上かかる学生が約6%おり、これらの学生に対しては実習等の終了時間や自然災害が予想される場合への配慮が必要と考えられる。また、通学に利用するバスと電車の接続を余裕のある時間帯にしてほしいとの意見が複数みられ大学として要望する必要がある。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の生活サイクルの中心は、学内および自宅での自習が44%であり、アルバイトを全く行っていない学生が68%、クラブ活動を行っていない学生が94%と概ね修学に専念できる環境にあると考えられる。入学前と入学後で本学のイメージが悪くなった学生が16%いるため、その要因を明らかにし、ネガティブイメージを払拭する必要がある。好きな講義・実習が2～4と答えた学生が57%いた半面、ないと答えた学生が25%おり、魅力ある講義や実習になるよう改善が必要と考えられる。大学生活の悩みとして勉強・成績(57%)、進路・就職(51%)、経済的問題(21%)が多く、きめ細かなサポートを行う必要がある。また、人間関係でも友人との関係(16%)、同級生との関係(9.5%)、教員との関係(4.8%)などが悩みになっている。悩みの相談相手には友達が91%と最も多く、親族(親兄弟等)68%、チューター(21%)、同級生(11%)となっているが、誰にも相談しない学生が27%ほどみられ悩みを相談できる環境整備を考える必要がある。また、休学や休学したいと思ったことがある学生が13%おり、心身の問題、勉強意欲の喪失、進路に疑問などが理由となっている。退学を考えた理由として勉強意欲の喪失、心身の問題、学力問題があがっている。留年したことがある学生は1.6%で、経済的支援や学力の支援を学校に求めている。

「自主学習について」設問 27～29

平日の一日平均の勉強時間は30分～120分以上が約81%であったものの30分未満・全くしないが3%ほど占めている。休日でも30分未満・全くしないが13%ほどみられ、学力低下の原因になっている可能性がある。

「学科としての対応・改善策」

学生の半数が車やバイクで通学しており、学生への交通安全の指導を強化する必要がある。また、通学に長時間を要する学生に配慮して、実習時間の効率化や、天候不順や自然災害時の対応を早め決定する必要がある。従来から、学生の問題や悩み(勉強・成績、進路・就職、経済的問題)についてチューターを中心に学科全体で対処しているが、中途退学の予兆を捉え、学生のモチベーションを維持する対応が必要とされる。学業不振、対人関係や不安などがきっかけに退学や除籍に至るのを防ぐため、学生のさまざまな悩みに対応することが重要になってくる。これらの問題の対応・改善策として、問題が生じる可能性のある学生を早期に発見し修学面と生活面を常に学科会議や学科教員間で共有しているが、さらに(1)教職員と保護者との連携の強化や保護者へ学修状況の通知や学生課・保健管理センターとの連携体制を推進する。(2)修学を円滑に進めるための改善策として、入学前の初年次教育を効果的に発展させるため入学後にコーチング・フォローの徹底化を図る。(3)一貫性を持ったエビデンスに基づいた学生指導を実施する。さらに、アクティブラーニング型授業を推進し自主学習による充実感が得られる教育内容とする。(4)さまざまな問題をチューターを中心としたチームで提供できる仕組みで学生のサポートを拡充する必要がある。

臨床心理学科 《アンケート結果の分析と学科としての対応・改善策》

「プロフィール」設問 1～5

回答率は37.5% (31名/82名)であり、1年生が全体の64.5%、2年生が35.5%を占めていた。通学手段は自動車は16.1%、バスが35.5%で、通学時間は58.1%が30分以内、60分以上が29.0%であった。公共交通機関であるバスの利用が比較的多く、それと同時に、自らで通学手段を確保する必要性を示していた。

「大学生活について」設問 6～26

講義以外の時間を自宅で過ごすのが19.4%、アルバイトが19.4%と比較的多かった。入学後クラブやサークル活動に参加をしているのは23.6%であった。54.8%がアルバイトしており、アルバイトをしている場合、最も多い頻度は週に1～3回であった。入学前後に本学のイメージは64.5%の学生が変わっていないと回答し、19.4%がよくなったと回答した。キャンパス内で過ごす場所は講義研究棟が54.8%、その他が19.4%であった。休日の過ごし方は48.4%がアルバイトをしていた。45.2%が家族との同居であり、51.6%が一人暮らしであった。学費は80.6%が親や親族からの援助で、54.6%がアルバイトで賄っていた。家族との同居の場合、生活費は73.3%が親や親族からの援助、53.3%が奨学金をアルバイトで賄われており、生活費は水道光熱費を除いて3万円未満が26.7%、5～10万円が40.0%を占めていた。一人暮らしの場合、生活費は3万円未満が50.0%、3～5万円が43.8%を占めていた。工面は親などからの援助が50.0%を占めたが、奨学金が68.8%であった。

好きな講義や実習の数はなしが9.7%で、次いで2～4つが50.5%であった。大学生活での悩みは、勉強や成績のことが71.0%、進路や就職のことが48.4%であった。また、悩みの相談の相手は、友達が75.0%、親・兄弟姉妹等が60.7%と多くなっていたが、チューター教員への相談が14.3%に留まった。休学した経験あるいは休学を考えた学生は16.1%で、その理由は学生間の問題、心身や身体の問題等が理由として挙げられた。また、退学を考えたのは16.1%で、その理由は多岐に及んでいた。

「自主学習について」設問 27～29

平日1日の平均勉強時間は30分～1時間が38.7%で、1時間以上が25.8%いた。休日の平均勉強時間は30分未満が29.0%で、35.5%が1時間以上であった。シラバスの内容は、83.9%周知していた。

「学科としての対応・改善策」

本学のイメージは学生の8割近くがポジティブに捉えてくれており、9割が好きな講義や実習があると答えている。その一方で、ネガティブな方向にイメージが変化したという回答も散見される。学生のイメージの変化に、教職員が果たす役割は大きい。これらの課題に対して、学科として取り組んでいくことが肝要であろう。具体的には、以下の2点の課題が考えられる。1つは、学生の7割が勉強や成績のことで悩んでいるにも関わらず、相談相手として、教員が1割強しか選ばれていないことである。これには、教員が相談相手になれるように、積極的なコミュニケーションを図る必要がある。普段、教員から進んで声をかけるとともに、各教員のオフィスアワーの周知を図り、その時間帯をうまく活用して学生が自主的に、気軽に話せるような環境づくりが大切であろう。

もうひとつの課題は、進路や就職の悩みを半数近くの学生が有していることである。本学科は、複数の資格が取得でき、様々な進路が考えられる。したがって、学生自身が自己の適性を見極めるため、今後、インターンシップを含めたキャリア教育の充実が望まれる。また、キャリアサポートセンターと連携を図りながら、学生個々の希望を実現するような支援体制の構築が望まれる。